

平成25年度
茨木市埋蔵文化財発掘調査概報6
- 国庫補助事業に伴う発掘調査 -

平成26年（2014年）3月
茨木市教育委員会

序 文

茨木市は大阪府北部に位置し、北は老の坂山地を介して京都府亀岡市と接しています。市域北部の山々は広大な森林を控え、市域南部へと流れる各河川に豊かな水をもたらしました。市域を流れる元茨木川、安威川、勝尾寺川流域には、古くから人々の生活が営まれ、その結果、多くの文化財が受け継がれてきました。

しかし、大阪と京都を結ぶ地にある本市は、近年大規模な開発により宅地化が進み土地利用の形態が変化したことで、これまでの残っていた多くの埋蔵文化財を現状のまま残すことが困難になってきました。

そのため、埋蔵文化財を記録して保存をおこなうことで、先人達から永く受け継がれてきた郷土の文化財を後世に伝えていく必要があります。

本書は、平成 25 年度に実施した個人住宅建設工事に伴う発掘調査の概要報告です。本書に記しました耳原遺跡、茨木遺跡、春日遺跡、倍賀遺跡は、いずれも市内を代表する遺跡です。これらの調査 1 つ 1 つの積み重ねを郷土茨木の歴史的遺産として、広く活用されることを望みます。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様に、ご理解と多大なご協力を賜りました。また、文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただき茨木市の文化財保護行政が推進できましたことを、感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成 26 年 3 月 31 日
茨木市教育委員会
教育長 八木章治

例　言

1. 本書は、平成 25年度国庫補助事業（総額 4,644,865 円、国庫 50%、市費 50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。平成 25年度事業として、平成 25年 4月 1日から平成 26年 3月 31日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。ただし、本書には、整理作業の都合から平成 25年 1月から平成 25年 12月末までに調査を終了したものについて登載した。
2. 調査の実施は、本市教育委員会社会教育振興課文化財係発掘調査員 大向智子、木村建明、高村勇士、富田卓見、閑桙、須田裕子、中東正之、藤田徹也が行った。
3. 本書の作成にあたっては、各調査担当者が執筆を行い、執筆分担は文末に記している。
4. 編集は、高村勇士と藤田徹也が行った。
5. 本書で使用している標高は、すべて T.P.（東京湾標準海水面）で表記し、各挿図に掲載した表記のうち、M.N. は磁北、また表記のないものは国土座標系（第VI系）に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖』（小山・竹原編）に基づく。
7. 出土遺物及び図面・写真類は、埋蔵文化財の活用に資するため茨木市教育委員会文化財資料館（〒 567-0861 大阪府茨木市東奈良三丁目 12番 18号 TEL072-634-3433）において保管している。

目次

序文	
例言	
第1章 位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第2章 平成25年度 発掘調査一覧	5
第3章 調査の成果	7
耳原遺跡 (MH13-1他)	7
耳原遺跡 (MH13-2)	11
春日遺跡 (KS13-3)	13
春日遺跡 (KS13-4)	15
春日遺跡 (KS13-5)	17
茨木遺跡 (IK13-1)	19
茨木遺跡 (IK13-6)	23
中条小学校遺跡 (CJ13-4)	25
中条小学校遺跡 (CJ13-7)	27
倍賀遺跡 (HK13-2)	31
牟礼遺跡 (MR13-8)	34
写真図版	37

挿図目次

第1図	茨木市周辺地形図	2	第22図	茨木遺跡(IK13-6)調査区配置図	23
第2図	平成25年度 発掘調査位置図	4	第23図	茨木遺跡(IK13-6)断面柱状図	23
第3図	耳原遺跡(MH13-1他)調査区配置図	7	第24図	茨木遺跡(IK13-6)調査地位置図	23
第4図	耳原遺跡(MH13-1他)調査位置図	7	第25図	茨木遺跡(IK13-6)調査区断面図・出土遺物実測図	24
第5図	耳原遺跡(MH13-1他)調査区平面・断面図	8			
第6図	耳原遺跡(MH13-2)調査区配置図	11	第26図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査区配置図	25
第7図	耳原遺跡(MH13-2)調査位置図	11	第27図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査地位置図	25
第8図	耳原遺跡(MH13-2)調査区平面・断面図	12	第28図	中条小学校遺跡(CJ13-4)調査区平面・断面図	26
第9図	春日遺跡(KS13-3)調査区配置図	13			
第10図	春日遺跡(KS13-3)調査位置図	13	第29図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区配置図	27
第11図	春日遺跡(KS13-3)調査区平面・断面図	14	第30図	中条小学校遺跡(CJ13-7)断面柱状図	27
第12図	春日遺跡(KS13-4)調査区配置図	15	第31図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査地位置図	27
第13図	春日遺跡(KS13-4)調査位置図	15	第32図	中条小学校遺跡(CJ13-7)調査区平面・断面図・出土遺物実測図	28
第14図	春日遺跡(KS13-4)調査区平面・断面図	16			
第15図	春日遺跡(KS13-5)調査区配置図	17	第33図	倍賀遺跡(HK13-2)調査区配置図	31
第16図	春日遺跡(KS13-5)調査位置図	17	第34図	倍賀遺跡(HK13-2)調査地位置図	31
第17図	春日遺跡(KS13-5)調査区平面・断面図・出土遺物実測図	18	第35図	倍賀遺跡(HK13-2)調査区平面・断面図・出土遺物実測図	32
第18図	茨木遺跡(IK13-1)調査区配置図	19	第36図	牟礼遺跡(MR13-8)調査区配置図	34
第19図	茨木遺跡(IK13-1)調査地位置図	19	第37図	牟礼遺跡(MR13-8)調査地位置図	34
第20図	茨木遺跡(IK13-1)調査区平面・断面図	20	第38図	牟礼遺跡(MR13-8)断面柱状図	35
第21図	茨木遺跡(IK13-1)出土遺物実測図	21	第39図	牟礼遺跡(MR13-8)出土遺物実測図	35

写真図版目次

図版1 耳原遺跡 (MH12-3・MH13-1)	39
MH12-3 (西から)	上段
MH13-1 (西から)	下段
図版2 耳原遺跡 (MH13-3・MH12-4)	40
MH13-3 (西から)	上段
MH12-4 (西から)	下段
図版3 耳原遺跡 (MH13-5) 他	41
MH13-5 (西から)	上段
耳原遺跡各調査区遠景	下段
図版4 耳原遺跡 (MH13-2) ・ 春日遺跡 (KS13-3)	42
MH13-2 全景 (北西から)	上段
K S 13-3 (東から)	下段
図版5 春日遺跡 (KS13-4・5)	43
K S 13-4 全景 (北西から)	上段
K S 13-5 (西から)	下段
図版6 中条小学校遺跡 (CJ13-4・7)	44
C J 13-4 全景 (北東から)	上段
C J 13-7 (西から)	下段
図版7 茨木遺跡 (IK13-1・6)	45
I K 13-1 第1面全景 (北東か)	上段
I K 13-6 南壁断面 (北から)	下段
図版8 倍賀遺跡 (HK13-2) ・ 牟礼遺跡 (MR13-8)	46
H K 13-2 2区 (東から)	上段
M R 13-8 北壁断面 (南から)	下段

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

茨木市は、大阪府の北部に位置し、東は高槻市、西は吹田市・箕面市・豊能郡豊能町、南は抵津市、北は京都府亀岡市に接しており、南北 17.05km、東西 10.07km と、南北に長く東西に短い市域を有している。

茨木市域の地理的特徴は、北半部と南半西部、南半東部の三地域に大きく分けられる。北半部は、標高 300m 前後の北摂山地及び、それから派生する丘陵が広がる。南半西部は、標高 50~100m 前後で洪積層からなる千里丘陵があり、南半東部は、市域東部を南北に縱断する安威川などの河川によって形成された沖積層からなる三島平野が広がり、大阪平野の一部をなす。また、北半部の北摂山地から南に佐保川が、北半部と南半西部の丘陵の間を東西に勝尾寺川が流れ、それらの両岸にも僅かに平地が存在する。

2. 歴史的環境

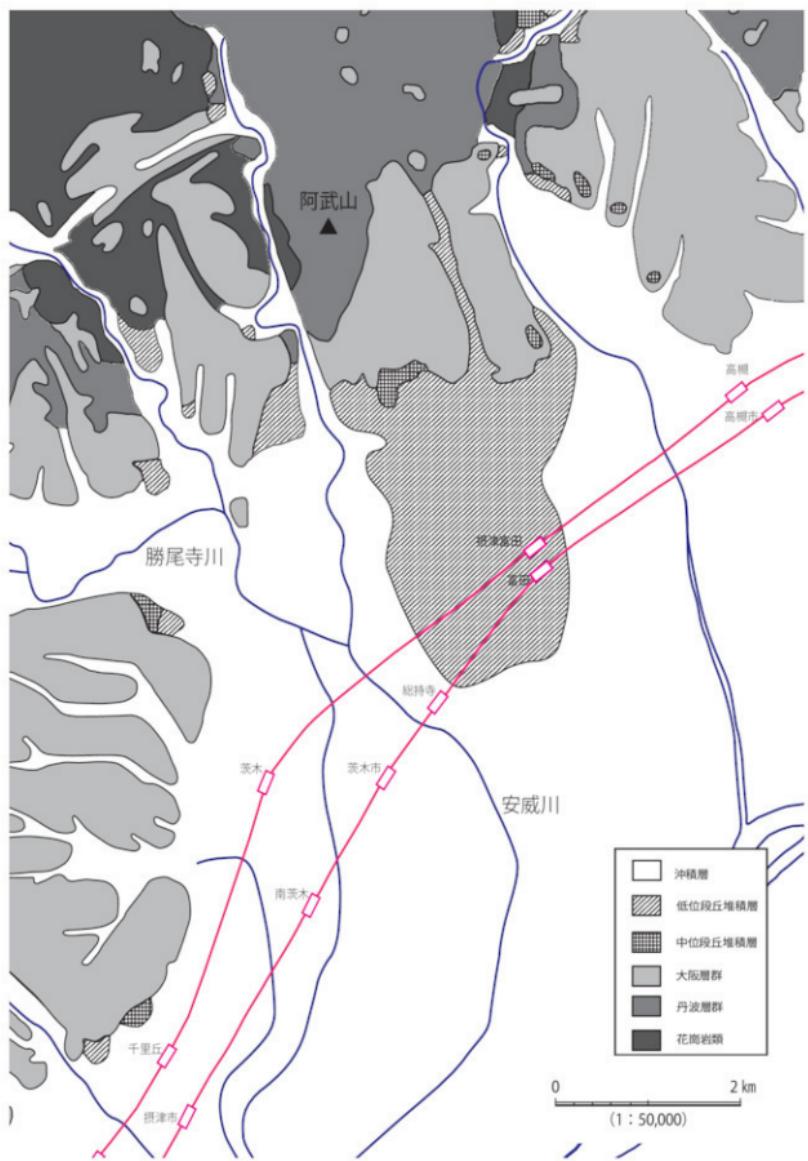
茨木市内で最も古い人類の痕跡は、山麓部の初田遺跡や丘陵部裾の太田遺跡、安威遺跡、耳原遺跡、郡遺跡などで表面採集や後世の遺物包含層内で検出された、旧石器時代後期のナイフ型石器や有舌尖頭器に認められる。また、平野部の微高地に立地する東奈良遺跡や新庄遺跡においてもナイフ型石器が出土している。しかし、未だ明確な旧石器時代の遺構等は確認されていない。

縄文時代においても、前期から中期の遺跡は少なく、縄文時代中期から後期の土器が、西福井遺跡や初田遺跡、太田遺跡において出土している。縄文時代後期から晩期になると遺跡数は増加し、耳原遺跡において縄文晚期の深鉢棺墓群が検出され、総持寺遺跡においても甕棺墓と考えられる土器が出土している。また、牟礼遺跡では、縄文晚期から弥生前期の土器や水田跡、井堰等が検出されている。

弥生時代前期には、東奈良遺跡、目垣遺跡、総持寺遺跡、溝昨遺跡、新庄遺跡に集落跡が見られる。前期末には、耳原遺跡や郡遺跡にも集落が形成される。前期から継続している東奈良遺跡などが規模を拡大していき、さらに中条小学校遺跡や見付山遺跡、倍賀遺跡、中河原遺跡、春日遺跡、太田遺跡、玉櫛遺跡、詳細は不明であるが高地性集落の石堂ヶ丘遺跡などで集落が出現する。この中で、特に前期から継続して集落が確認される東奈良遺跡は、他地域の拠点的集落と同様、幾重もの環濠をめぐらせており、重要文化財に指定されている石製銅鐸鋳型などが出土していることから、青銅器などの鋳造工房を持つ地域の拠点的集落であると考えられている。中期には遺跡数がさらに増加し、河川の両岸や丘陵部、山地部まで広がりをみせる。

古墳時代になると、北部の丘陵に佐保川を挟んで紫金山古墳、將軍山古墳という全長 100m 前後の前方後円墳が相次いで築造される。紫金山古墳からは、三角縁神獣鏡を含む 12 面の銅鏡や、貝製の鍬形石や車輪石、筒型銅器、武具などの副葬品が出土している。近接して築造された両古墳について、広瀬覚氏は『茨木市史』において、その出土遺物や、竪穴式石室の向き、葺石のあり方などから、將軍山古墳には東四国地域との関係が、紫金山古墳には奈良盆地東南部や朝鮮半島との関係が密接であった可能性を指摘している。

古墳時代中期には、宮内庁により「繼体天皇三嶋藍野陵」に治定されている前方後円墳、太



第1図 茨木市周辺地形図

田茶臼山古墳が全長226mの規模で築造される。これと同時期の小規模な古墳43基（1基の円墳を除いて他はすべて方墳）が、総持寺遺跡において、密集して検出されている。これらの古墳の埴輪は高槻市新池埴輪窯で製作され、太田茶臼山古墳に供給されたものと共通の特徴を持ち、太田茶臼山古墳と総持寺遺跡の関連性が指摘される。

古墳時代後期には、南塚古墳、青松塚古墳、海北塚古墳、耳原古墳などが築造される。特に、南塚古墳は、同時期の古墳と比較すると大規模な横穴式石室と装飾付台付壺が出土していることが特筆される。耳原古墳も大型の横穴式石室を持ち、内部に2基の割り抜き式家型石棺がある。また、新屋古墳群、安威古墳群、将軍山古墳群、長ヶ瀬古墳群、郡古墳群、桑原古墳群など横穴式石室を主体とする群集墳が、山麓部を中心に築造される。

終末期古墳としては、棺内にガラス玉や金糸が出土し、藤原鎌足墓と目されている阿武山古墳などが築造され、『藤氏家伝』にある「三嶋別業」の存在を想起させる。

続く奈良時代になると、茨木市域は浜津職（国）嶋下郡に編成され、平城遷都にともない、平城から山陽道諸国を連結し太宰府に達する道上に「殖村駅」が置かれた。また、未だ確定的ではないが、郡という地名や掘立柱建物群、墨書き土器などの出土、穂積庵寺の存在から郡遺跡周辺が嶋下郡衙である可能性が指摘されている。また、総持寺遺跡や総持寺北遺跡においても、総柱の掘立柱建物群や「調」とヘラ書きされた須恵器、円面鏡の破片が出土しており、官衙的性格が指摘され注目される。

中世の遺跡としては、東奈良遺跡や中条小学校遺跡、舟木遺跡、新庄遺跡、玉櫛遺跡、宿久庄遺跡などが挙げられる。中でも、玉櫛遺跡は11世紀後葉・12世紀前葉～15世紀前葉頃まで通して集落が営まれている。

中世末から近世初頭の遺跡には、茨木城、水尾城、三宅城、福井城、泉原城などの城郭がある。現在の茨木市中心部には茨木城が築かれた。その城主は、茨木氏、中川氏、片桐氏と変遷し、その内容や規模も変化すると考えられるが、一国一城令（元和元年、1615年）により廃城になった後も、その周辺の水路や地割等は現在まで影響している。しかしながら、茨木城の実態はなお不明な点が多く、限定的ながらも、発掘調査によって得られる知見は、茨木城周辺の実像の解明に向けて重要となるであろう。

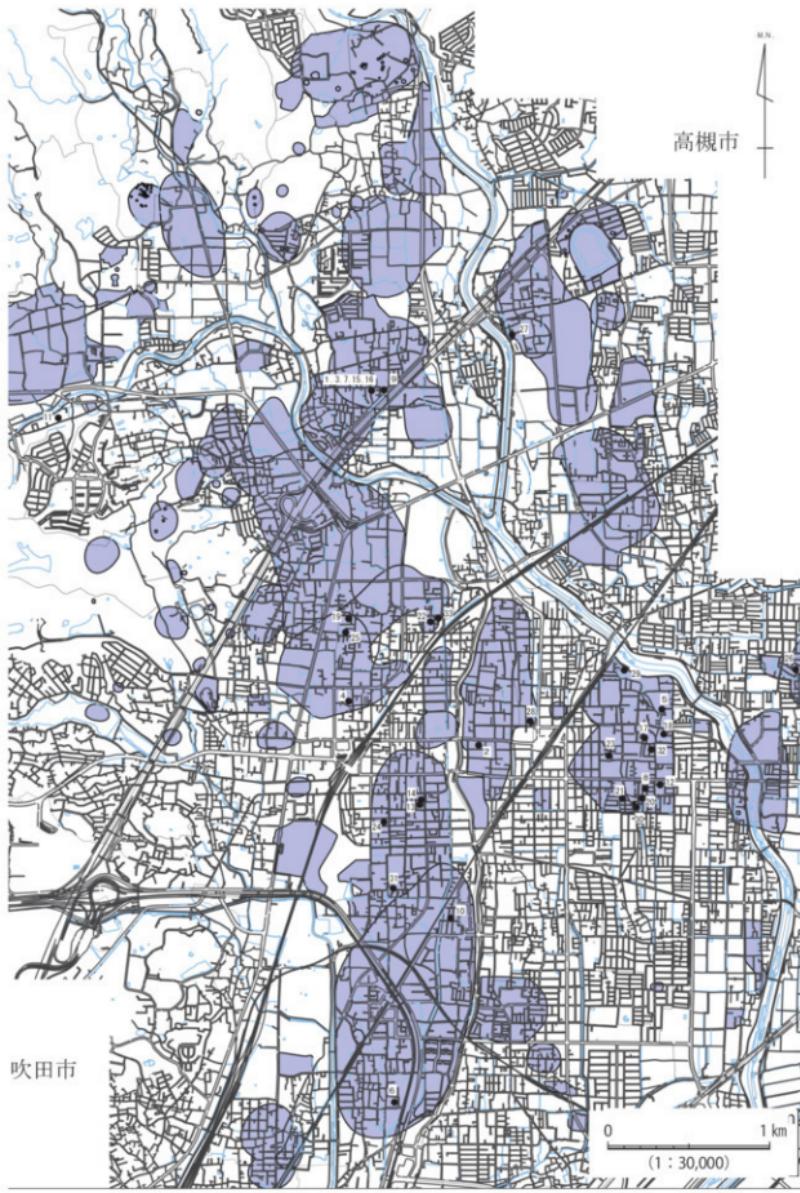
参考文献茨木市 2012『新修 茨木市史 第一巻 通史Ⅰ』

茨木市教育委員会 2005『郡遺跡発掘調査概要報告書』

茨木市教育委員会 2002『平成13年度発掘調査概報』

茨木市教育委員会 2013『平成24年度発掘調査概報』

中村博司編 2007『よみがえる茨木城』



第2図 平成25年度 発堀調査地位置図

第2章 平成25年度 発掘調査一覧

番号	所在地	遺跡名	実施日	調査担当	特記
1	耳原一丁目281-8	耳原遺跡	H25.4.8~4.9	中東	本書所収
2	大手町1653-3, 1653-4	茨木遺跡	H25.6.27~7.3	大向	本書所収
3	耳原一丁目281-9	耳原遺跡	H25.7.22	中東	本書所収
4	春日一丁目84-5	春日遺跡	H25.8.5~8.7	中東	本書所収
5	中村町571-4	牟礼遺跡	H25.6.27	木村	遺構・遺物なし
6	沢良宜西二丁目127-6	東奈良遺跡	H25.6.11	木村	遺構・遺物なし
7	耳原一丁目281-10	耳原遺跡	H25.7.22	中東	本書所収
8	園田町798-21	牟礼遺跡	H25.7.3	閔	遺構・遺物なし
9	耳原一丁目276-5	耳原遺跡	H25.7.25~7.26	大向	本書所収
10	東奈良一丁目661-1	東奈良遺跡	H255.7.22	富田	遺構・遺物なし
11	宿川原町982, 983	西国街道	H25.8.23	中東	遺構・遺物なし
12	園田町612-2, -6, -4・613-12	牟礼遺跡	H25.9.4	中東	遺構・遺物なし
13	下中条町23-2, 24-7, 25-2	中条小学校遺跡	H25.9.17	大向	遺構・遺物なし
14	西中条町140-7, 140-13の一部	中条小学校遺跡	H25.8.27	大向	本書所収
15	耳原一丁目281-11	耳原遺跡	H25.9.5	中東	本書所収
16	耳原一丁目281-7	耳原遺跡	H25.9.5	中東	本書所収
17	中津町885-16	牟礼遺跡	H25.10.8	木村	遺構・遺物なし
18	中津町560-1	牟礼遺跡	H25.9.18	大向	遺構・遺物なし
19	春日五丁目77-15	春日遺跡	H25.9.24~9.25	大向	本書所収
20	園田町745-5	牟礼遺跡	H25.10.8	木村	遺構・遺物なし
21	園田町754-2・754-5	牟礼遺跡	H25.11.6	富田	遺構・遺物なし
22	春日四丁目228-3	信賀遺跡	H25.11.18~11.19	木村	本書所収
23	中津町837-1, 837-8	牟礼遺跡	H25.10.8	木村	遺構・遺物なし
24	西中条町137-5	中条小学校遺跡	H25.10.10	中東	遺構・遺物なし
25	春日五丁目204-29	春日遺跡	H25.10.30	木村	本書所収
26	鮎川二丁目84-7	鮎川遺跡	H25.11.18	高村	遺構・遺物なし
27	太田一丁目712-6, -9	太田遺跡	H25.11.12	富田	遺構・遺物なし
28	別院町1437-1, 1437-3の各一部	茨木遺跡	H25.12.2	高村	本書所収
29	末広町31-1の一部	牟礼遺跡	H25.12.3	高村	遺構・遺物なし
30	園田町749-24, 749-25	牟礼遺跡	H25.11.14	高村	本書所収
31	奈良町590-2, 591-2の一部	中条小学校遺跡	H25.12.11~12.12	高村	本書所収
32	中津町858-25	牟礼遺跡	H25.12.16	高村	遺構・遺物なし
33	春日四丁目227-7, 227-8	信賀遺跡	H25.12.16	高村	遺構・遺物なし

第3章 調査の成果

耳原遺跡（MH 13-1他）

所 在 地 茨木市耳原一丁目

調査期間 平成 25 年 4 月 8 日（他）

調査担当 中東正之・大向智子

調査に至る経過

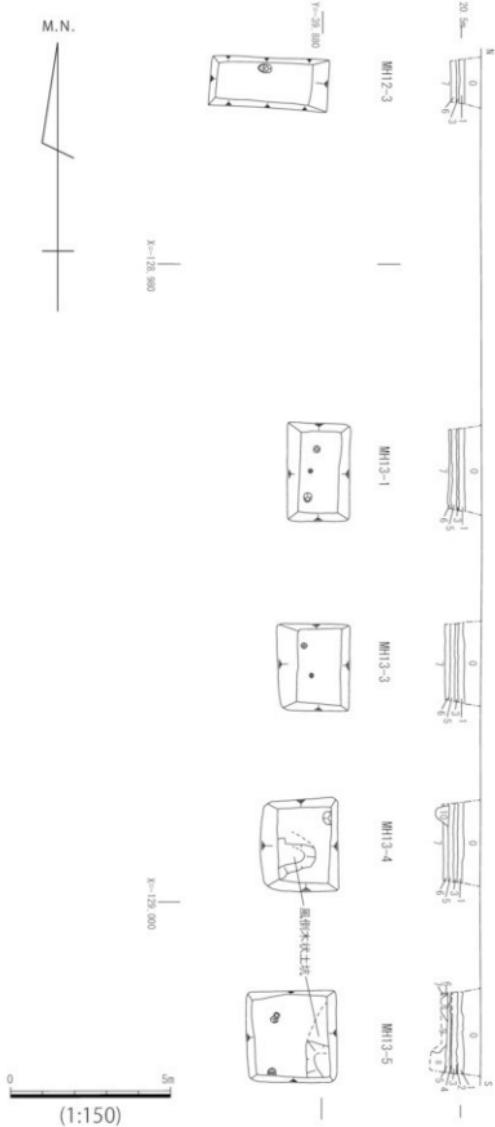
本調査は、耳原一丁目で計画された個人住宅に伴い確認調査をおこなったところ、包含層・遺構等が認められたため、本発掘調査をおこなった。なお、同地における宅地化によって、平成 25 年 3 月から順次、93 条の届出が提出された。個々の調査区は、極めて関連性が強いものであり、そのため、平成 25 年 12 月までに終了した調査については、一括して報告する。耳原遺跡は、耳原の帝人大阪研究センターの建つ高台から名神高速道路を越えたあたりまで、南北約 800m の舌状を呈する台地地形（低位段丘低位面）を中心に展開する、縄文時代晚期から弥生時代中期後半の集落を主体とする遺跡である。この低位段丘は、茨木市北部丘陵地域から平野へ流れ出る安威川右岸の山麓部から派生し、名神高速道路を越えたあたりまで約 2km に渡って南に延びる。山麓部では、安威の集落の載る扇状の地形（低位段丘中・高位面）を形成するが、真正断層と安威断層が形成する地溝帯で一旦途切れるため、耳原地区では、茨木川と安威川に挟



第3図 耳原遺跡（MH 13-1他）調査区配置図



第4図 耳原遺跡（MH 13-1他）調査位置図



0. 現代塹土。
1. 5Y3.1リーブ黑色、細織あり堅土に成るが粘質シルト。
 2. 5Y4.1白色、細織より堅土含むが質質シルト。
 3. 酸化鉄物質层、2.5Y4.3リーブ褐色粘質シルトと2.5Y1.20Ⅲ灰黄色粘質シルトの相融合の泥土（土器の付着物あり、3号地では下位部の粘土層含む）。
 4. 10Y4.4褐色粘質シルトと0Y3.25褐色粘質シルトの堆土（Xと近似しているが、輪まり良好で砂の付着有る）。
 5. 10Y3.1黒褐色、細少織あり粘質シルト（土器片あり、植物根跡小発見）。
 6. 10Y3.2墨褐色（上位）～10Y3.4～5A 黄褐色（下位）細少織あり粘質シルト（植物根跡が判明）。
 7. 10Y3.3～5A 黄褐色、細少織あり粘質シルト（5号地では礫質となる。その下位には基質が砂質でなく板状、中層が浮かぶ）。
 8. 10Y3.2墨褐色、細少織あり粘質シルト（上位）～10Y3.3～5A 黄褐色粘質シルト（下位）細少織あり粘質シルト。
 9. 10Y3.3～5A 黄褐色、細少織あり粘質シルト。
 10. 7の内側の部分を含む10Y3.20Ⅲ灰黄色（上位）～10Y3.2墨褐色（下位）細少織あり粘質シルト、堆土は幅約2～10m、小窪地5～5cm、中窪地10cmとしている。

第5図 耳原遺跡（MH 13-1他）調査区平面・断面図

まれた沖積平野に独立した台地として認識される。

基本層序

調査地は、台地地形南端の西側縁辺付近に位置する。当地西方には段丘構成層を示すと思われる小崖が断続的に見られるが、低地との比高差はわずかなため、現氾濫原面に分類される立地である。宅地化以前は南へ下る緩傾斜地に展開する水田および畑地であった。

現状は、前面道路並みに盛土整地された更地である。現地表面は標高約 21.1m を測る。基本層序は、上層より、第 0 層（約 0.5m）は現代盛土層である。

第 1・2 層（約 0.2m）は、近現代の耕作土層である。第 3・4 層（0.1～0.2m）は、縮まりのある人為層で、水田鋤床に相当すると思われる。第 5 層（0.1～0.18m）の黒褐色礫あり粘質シルトは、わずかに弥生土器とみられる細片を含む包含層である。集落が展開した時期の旧表土に対応すると思われる土壤化層である。第 6 層（0.1～0.2m）の黒褐色～にぶい黄褐色礫あり粘質シルトは、遺跡の基盤層となるが、第 5 層からの土壤化が及んでいる漸移層である。稻の根跡が到達しているところから、水田の有効土として機能していたことが伺われる。断面観察では、本層上面から切り込む遺構を確認しているが、平面プランでは平準化されて見えるため、遺構検出面として捉えることはできなかった。第 7 層のにぶい黄褐色礫あり砂混粘質シルトは基盤層である。段丘構成層もしくはこれを被覆する沖積層と考えられる。粘質シルトを基質とし、北側では砂礫が優勢となる。いずれも下位では堅固な礫層に転ずるとみられる。尚、第 8・9 層は風倒木状の土坑埋土、第 10 層はピット埋土である。

遺構

遺構検出は、第 7 層を検出面とした。検出面の標高は、19.9～20.1m を測る。各調査区合せ、ピット 11 基と風倒木状の土坑 2 基である。ピットは、実際の成立面からの規模を考慮しなければならないが、7 号地東壁にかかるものを除けば、径 20cm 以下、深さ 10cm 程度の小形のものである。いずれも柱痕は確認できず、その配列も建物などを構成する柱穴として認識することはできなかった。埋土は包含層に近似した單一層で、一部に基盤層の偽礫を含む。風倒木状の土坑は、7・8 号地で検出した。調査区外に至るため全容は不明であるが、8 号地ではトレーンチ幅を超える 2.5m 以上、深さ 0.6m 以上を測る。内部に偽礫や壌方などの人為痕跡がなく、傍らの基盤層とほぼ同様の土塊が何らかの外力で転回したように充填され、この土塊を包むような形で暗色層が貫入している。暗色層を追って全壠することはできなかったが、これを全壠すると、いわゆる風倒木痕として認識される、梢円や三日月状の平面形で椀状の窪みとなるとみられる。遺物は、5 号地床上層の瓦器と 5・6・7 号地包含層の弥生土器がある。遺構から出土したものはなかった。いずれも摩滅した破片である。弥生土器については甕もしくは壺の底部付近と部位不明の破片である。器面調整は摩滅のため不明であるが、タタキは認められないため、弥生時代中期以前のものと考えられる。胎土は密で 2～3mm の砂粒を含む、在地系のものである。まとめ耳原遺跡は、茨木川と安威川に挟まれた沖積平野にあって、独立した形の段丘上を中心に展開している。本調査では、段丘構成層もしくはそれを被覆する沖積層を基盤とする、集落の一端を示す遺構面を検出した。土壤化が強く進行していることと、洪水等による地層の疊重が見られないことから、長期間安定した環境が続き、人間活動が営まれていたことが伺われる。耳原遺跡の南端で沖積面に埋没する低位段丘は、茨木川と安威川の合流地

点付近まで続いており、山麓からの総延長は約2.7kmに渡っているとされている。この低位段丘を基底に持つ沖積面（低位段丘埋没面）においても、縄文時代晩期から弥生時代前期の集落である五日市東遺跡があらたに発見されている。隣接する耳原遺跡との関係など、三島地区では数少ない縄文時代から弥生時代への移行期の集落の解明は、三島地区の同時期の集落の消長を探るうえでも注目される。今後の発掘調査に期待したい。（中東）

参考文献

茨木市広報広聴課市史編纂室 2012「新修茨木市史第1巻 通史編1」

名神高速道路内遺跡調査会 1998「耳原・五日市遺跡発掘調査報告書」

耳原遺跡（MH 13-2）

調査地 茨木市耳原一丁目

調査期間 平成 25 年 7 月 25 日～7 月 26 日

調査担当 大向智子

調査に至る経過

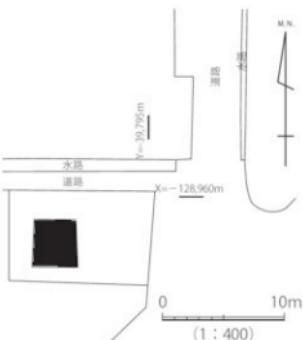
本調査は、茨木市耳原一丁目で計画された個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成 25 年 7 月 25 日に確認調査をおこない、包含層及び遺構を確認したため、本発掘調査をおこなった。申請箇所の西側約 16.5m²を対象とした。

基本層序

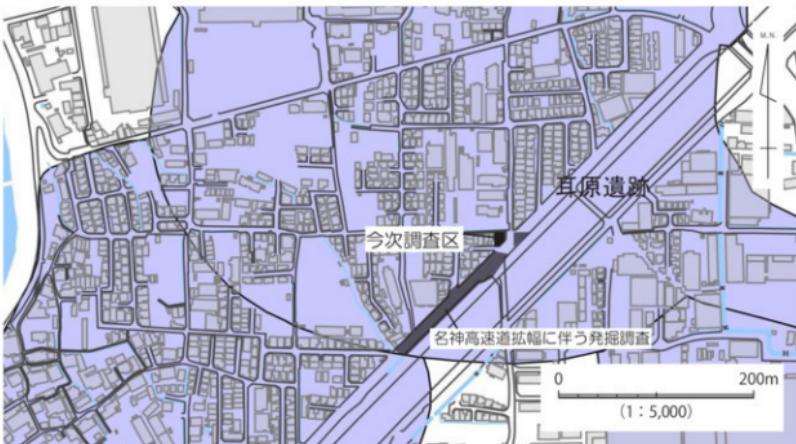
南壁面では、盛土（層厚約 60cm）直下から①作土：5B5/1青灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約 15cm）

②作土：2.5Y5/2暗灰黃色極細粒砂まじり粘質シルトにマンガン粒含む（約 10cm）③作土：2.5Y5/3黃褐色極細粒砂まじり粘質シルトにマンガン粒含む（約 8cm）④包含層：10YR3/1 黒褐色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む（約 30cm）⑤ベース土：10YR5/2灰黃褐色極細粒砂まじり粘質シルト（約 20cm）⑥地山：10YR5/4にぶい黃褐色粘質シルトまじり粗砂に大礫多量に含む（20cm以上）が堆積している。西壁面では①層が厚く堆積するが、その他の基本層序は同じである。

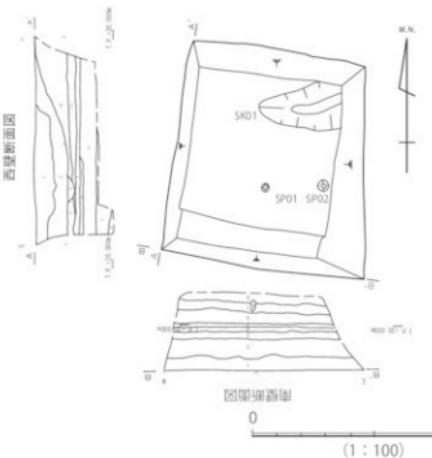
盛土内には、ブロック状の④層の土が多量に含まれていることから、過去の工事の際に包含層の一部が削られ盛られている可能性が高い。包含層上面からの遺構の切り込みを確認で



第 6 図 耳原遺跡（MH 13-2）調査区配置図



第 7 図 耳原遺跡（MH 13-2）調査位置図



1. 盛土 2.5Y6/2 灰黄色大繩まじり粗砂
2. 盛土 10Y3/1 黒褐色粘質シルトブロック、2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルトブロックの混土
3. 作土 5B5/1 青灰色極細粒砂混じり粘質シルト
- 3a. 7.5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト
- 3b. 5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト
4. 作土 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂混じり粘質シルトマンガン粒含む
5. 作土 2.5Y5/2 黄褐色極細粒砂混じり粘質シルト、上面酸化、マンガン粒含む
6. 包含層 10Y3/1 黑褐色極細粒砂混じり粘質シルト、土師質土器片（摩滅著しい）含む
7. ベース土 10Y5/2 灰黄褐色極細粒砂混じり粘質シルト 6層質入
8. 地山 10Y5/4 にぶい黄褐色粘質シルトまじり粗砂、大繩、多量に含む
- A. 5Y5/1 灰色極細粒砂混じり粘質シルト

第8図 耳原遺跡 (MH 13-2) 調査区平面・断面図

の厚い包含層とピット2基、土坑1基を検出した。遺物に関しては時期を特定できるものを確認できなかったが、弥生時代の所産であろうか。当該地に近接する名神高速道路拡幅に伴う発掘調査の成果によれば、当該地の東側では遺構の密度は低く、遺物量も少ない。また、標高20.0m付近で包含層を、19.8m付近で地山面を検出しており、今回の調査成果と同様の成果がみられる。それらと比較して当該地の南側の調査では、弥生時代中期前半の堅穴住居や多数のピット、土坑が検出されている。地山面の標高は東端で19.2m、西端で19.8mを測り、緩やかな傾斜がみられる。これらの状況から当該地は茨木川と安威川に挟まれた舌状に張り出した台地上に位置しており、弥生時代の集落は安威川へ向かって下る緩やかな傾斜地にかけて広がっていたと考えられ、当該地は、こうした耳原遺跡弥生時代集落の一端として捉えられる。

(大向)

参考文献

名神高速道路内遺跡調査会 1998 『名神高速道路内遺跡調査会調査報告書第8輯 中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う耳原遺跡・五日市遺跡発掘調査報告書』

きなかつたため、⑤層上面で遺構検出を行った。包含層検出面はT.P.+20.0m、遺構検出面はT.P.+19.7~19.8mである。

遺構・遺物

ピット2基と土坑1基を検出した。各遺構の埋土は、包含層と同一の埋土であった。出土遺物としては、土師質の土器等が認められるが、磨耗が著しく時期の特定はできない。SP01、SP02ともに直径約15~20cm、深さ約15cmであり、どちらも単一の埋土であるため埋没時期は、ほぼ同時期であると考えられる。まとめ 本調査において、層厚約20~30cm

春日遺跡（KS 13-3）

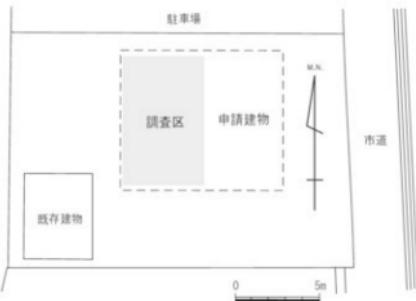
所在地 茨木市春日一丁目 84番5

調査期間 平成25年8月5日～7日

調査担当 中東正之

調査に至る経過

春日遺跡は、千里丘陵から派生した緩傾斜面（低位段丘を覆う冲積面）に展開する、弥生時代中期から中世の複合遺跡である。本調査地は、包蔵範囲の南端部に位置する。春日一丁目において個人住宅建設に伴い93条が提出されたため、平成25年8月に確認調査をおこなった。結果、既往の調査と類似する包含層と考えられる層を検出、また、その層直下より切り込む遺構を確認したため、本発掘調査をおこなった。



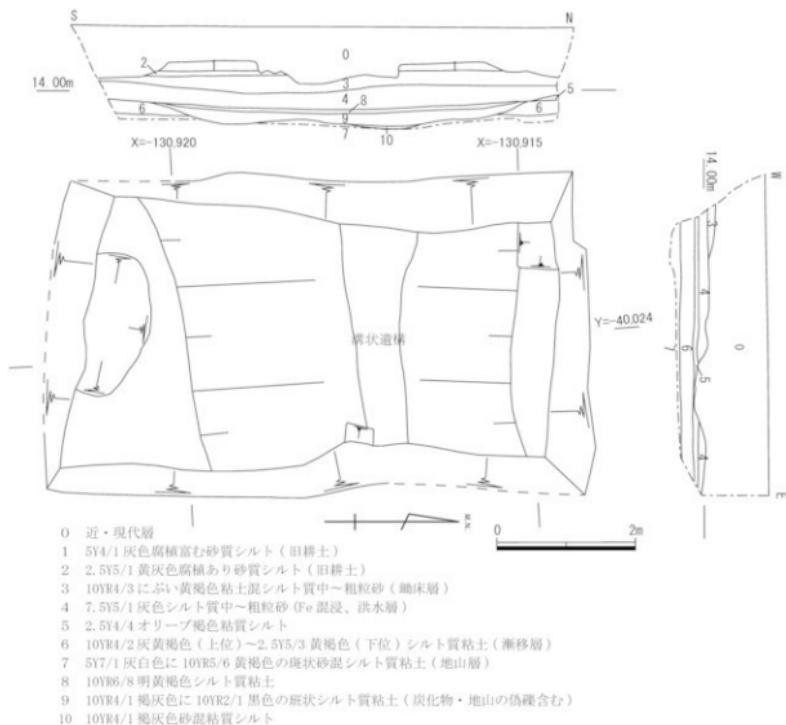
第9図 春日遺跡（KS 13-3）調査区配置図

基本層序

現地表面は、標高約14.9mを測る。基本層序は、上層より、第0層（約0.5m）は現代盛土層である。第1・2層（約0.2m）は近現代の耕作土層である。第3層（約0.2m）の鈍い黄褐色粘土混シルト質中～粗粒砂は、主に第4層を母材とし、耕土由来の偽礫を含む、近世以降の鋤床層である。第4層の灰色シルト質中～粗粒砂は、洪水運搬物に由来すると考えられるが、その時期は不明である。第5層（約0.05m）のオリーブ褐色粘質シルトは、旧表土に相当する土壤化層と考えられる。遺物は出土しなかったが、層序的には、春日遺跡の古い段階の包含層に



第10図 春日遺跡（KS 13-3）調査位置図



第11図 春日遺跡（KS 13-3）調査区平面・断面図

相当すると推測される。第6層の灰黄褐色～黄褐色シルト質粘土（約0.2m）は、漸移層である。第7層の灰白色に黄褐色の斑状砂混シルト質粘土は基盤層である。

遺構

検出遺構は、標高13.85mを測る第6層上面から切り込む、溝幅4.2～4.8m、深さ0.2～0.25mを測る、東西方向の溝である。埋土は3層に分かれる。上層の明黄褐色シルト質粘土は、当初基盤層と誤認したほど似た層相であった。中層の褐灰色に黒色の斑状シルト質粘土は、炭化物と基盤層の偽礫を含む。下層は、褐灰色砂混粘質シルトである。埋土からは流路としての機能は想定し難い。遺物は全く出土しなかったが、炭化物や基盤層の偽礫を含むことから、古墳の周溝であった可能性が考えられる。

まとめ

平成24年度に当地の東側約40mの地点で発掘調査が実施されている。包含層と遺構面が検出されているが、希薄な層相であり、その性格や時期は不明であった。当地は春日遺跡の集落の縁辺部にあたると考えられるが、その土地利用の状況については、今後の調査例の増加を待ち、検討したい。（中東）

春日遺跡（KS 13-4）

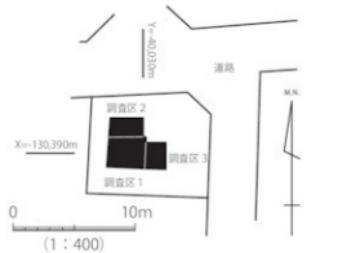
調査地 茨木市春日五丁目 77-15

調査期間 平成 25 年 9 月 24・25 日

調査担当 大向 智子

調査に至る経過

春日五丁目で計画された個人住宅建設に伴い確認調査をおこなったところ、包含層および遺構を確認したため、本発掘調査をおこなった。なお、残土置き場の関係から、調査区を 3 つに分けている。そのため、便宜上、確認調査とその面積を広げた調査区 第 12 図 春日遺跡（KS 13-4）調査区配置図を調査区 1、その北側に延長した部分を調査区 2、調査区 1 東側を拡張した部分を調査区 3 と呼称し報告する。



基本層序

南壁面では、盛土（層厚約 40cm）直下から①作土：5Y5/1灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約 10cm）②床土：5Y6/1灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約 5cm）③包含層 1：10YR5/1褐色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む、マンガン粒多量に含む（約 6cm）④包含層 2（遺構面 1）：10YR6/1褐色極細粒砂まじり粘質シルトに土師質土器片含む（約 5cm）⑤地山（遺構面 2）：10YR6/2明黄褐色粘質シルトが堆積する。④層上面から切り込む遺構と⑤層の地山を切り込む遺構があり、遺構面は 2 面存在する。西壁面では、南から北へかけて③の包含層が 15～20cm の層厚となり、④の包含層がなくなる。



第 13 図 春日遺跡（KS 13-4）調査位置図

遺構

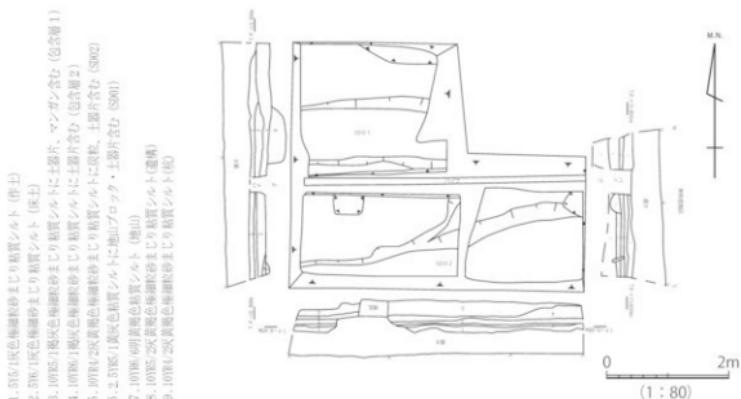
調査区1では、北側と南側で溝を2条検出した。北側で検出した溝（SD01）は南肩のみ検出しており、南側で検出した溝（SD02）は北肩のみ検出した。調査区2で、SD01の北肩を検出し、幅約1mの東西へのびる溝を確認した。深さ約30cmの溝で、埋土として2.5Y5/1黄灰色粘質シルトに地山ブロック含むが堆積し、遺物として須恵器片と土師質土器片が出土している。また、SD02の広がりを確認するため設けた調査区3では、全体が10YR4/2灰黄褐色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒含む、の埋土で覆われており、SD02の全貌を明らかにすることができなかった。ただし、調査区1で、SD02の北肩を検出しており、全体として南西から北東方向へのびる溝と考えられる。遺物として、土師質土器片が出土している。包含層内からも、須恵器甕の体部片や土師質土器片が出土しているが、出土した全ての遺物が細片のため詳細な時期を特定できない。

まとめ

当該地は弥生時代から中世にかけての複合遺跡である春日遺跡包蔵地内に位置する。東側には倍賀遺跡、北側には郡遺跡が広がり、春日遺跡包蔵地の北東側縁辺部にあたる。本調査での遺構検出面は地山直上でT.P.+15.6mである。また、包含層1の直上でも遺構の存在を確認できており、T.P.+15.7mである。平成22年度に行われた当該地から北へ約200m離れた場所での調査では、包含層2は存在せず、包含層1と同様の層が約20cmの厚さを保って堆積している。T.P.+15.5mで地山を検出し、その地山を切り込んで南北へのびる溝が確認されている。この溝は遺物を含んでおらず、周辺の調査から古墳時代後期頃のものである想定がなされている。本調査時に検出した溝との関わりは不明であるが、遺構及び包含層からの出土遺物の様相から古墳時代以降に形成されたものと想定できるため、同時期に存在していた溝の可能性を考えられる。今回の調査では、2期にわたる包含層が残る境界を確認することができた。また、春日遺跡の縁辺部に位置することから、集落を区切る溝の可能性を考えることができる。（大向）

参考文献

茨木市教育委員会 2011 『平成22年度発掘調査概報-個人住宅建築に伴う発掘調査報告-』



第14図 春日遺跡（KS 13-4）調査区平面・断面図

(春日遺跡 (KS 13-5)

所在地 茨木市春日五丁目 204番 29

調査機関 平成 25 年 10 月 30 日

調査担当 木村 健明

調査に至る経過

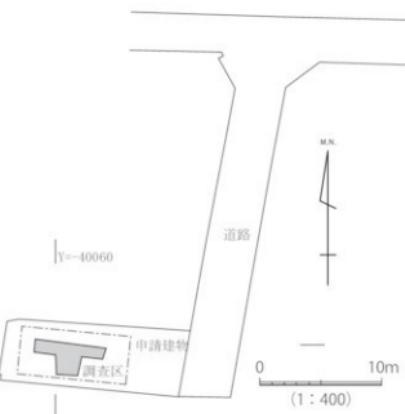
春日遺跡は、茨木市の西北部、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に位置する弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。北西部は郡遺跡、北東部は倍賀遺跡と接する。今回の調査は、個人住宅建設に伴い、約 $X=-130485.0$ 7.5m² の調査を実施した。

基本層序

現地表面の標高は 16.0m 前後を測る。盛土（厚さ 50cm）の下に灰色粗砂混じり粘質シルト層（旧耕作土・厚さ 15cm）、灰オーリープ色粗砂混じり粘質シルト層（厚さ 10cm）があり、その下に遺物包含層である暗灰黄色粘質シルト層（厚さ 10cm）が存在する。包含層の下は、地山である灰白色～明黄褐色粘土層となる。

遺構

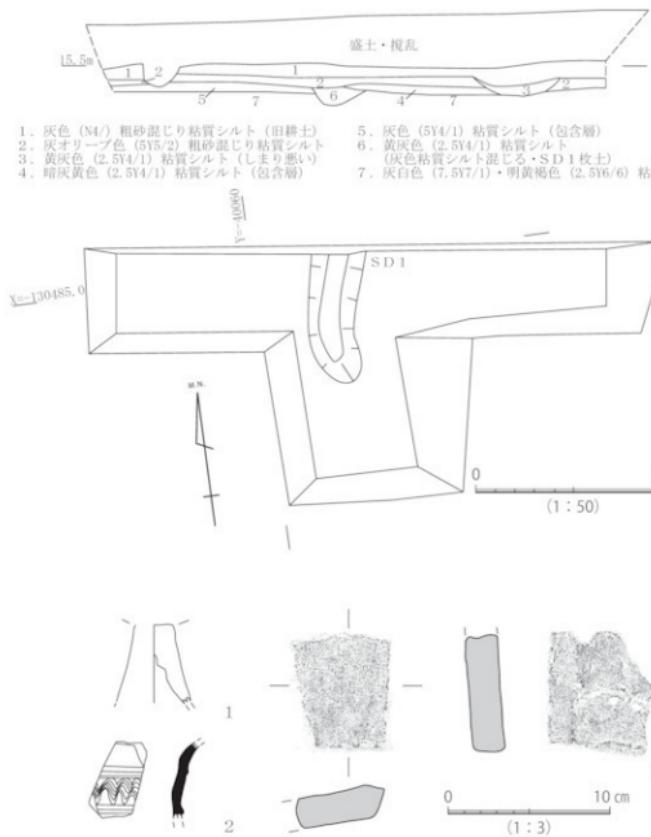
調査区の中央付近で、南北方向の溝 1 条を検出した。検出長 85cm、幅 50cm、深さ 20



第 15 図 春日遺跡 (KS 13-5) 調査区配置図



第 16 図 春日遺跡 (KS 13-5) 調査地位置図



第17図 春日遺跡（KS 13-5）調査区平面・断面図・出土遺物実測図

合面で分離したものと思われる。2は須恵器壺である。頭部の破片と思われる。頭部の突帯2条と、各突帯下に凹線を施す。また突帯の間に櫛描波状文を施す。3は平瓦である。狭端面と側面の片側が残存する。残存長7.0cm、残存幅5.3cm、厚さ1.7cmを測る。凹面・凸面ともナデを施す。凹面側縁に面取りを施す。色調は橙色からにぶい黄橙色を呈する。

まとめ

今回の調査は狭小な面積でおこない、遺物包含層の存在を確認し、溝1条を検出したのみであった。しかし、過去におこなわれた周辺の確認調査においても、今回と同様に遺物包含層の存在が確認されており、周辺にも更に遺構が分布していると考えられる。周辺は既に宅地となっており、広範囲の調査をおこなうことは難しいことから、今回のような小規模な調査成果を蓄積していくことで、周辺の様相が明らかになっていくと思われる。（木村）

c mを測る。南側は端を確認したが、北側は調査区外に延びる。埋土は黄灰色粘質シルト層である。遺物は出土していない。

遺物

1～3はいずれも包含層からの出土である。1は、土師器高杯脚部である。残存高4.7cmを測る。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。上面は剥離したような様子であり、杯部とは接

茨木遺跡（IK 13-1）

調査地 茨木市大手町 1653番3及び1653番4

調査期間 平成25年6月27日～7月3日

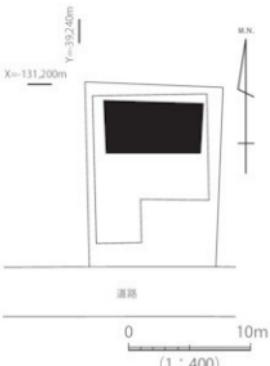
調査担当 大向智子

調査に至る経過

茨木市大手町において個人住宅建設の計画がなされ、確認調査をおこなったところ、遺構・遺物等が認められたため、本発掘調査をおこなった。調査面積は36m²である。

基本層序

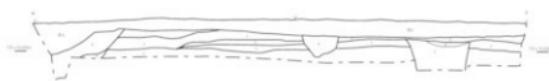
今次調査区の基本層序として、調査区全域に約20cmの現代盛土が認められ、①2.5Y5/1黄灰色粘質シルト混じり細粒砂（層厚約5～20cm）、②10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり粘質シルト（層厚約10cm）でその下③2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混じり粘質シルトとなる。③層は、茨木遺跡周辺でみられる湿地性堆積層の様相を呈している。周辺の調査では、③層に相当する層から須恵器等が出土している例もあるが、今次調査において③層での出土遺物は確認できず、また、壁際に側溝を設置し下層観察もおこなったが、③層から切り込む遺構は確認できなかった。次に示す各遺構は、①層上面と②層上面で検出しており、それぞれ第1面、第2面検出遺構として報告をする。（大向・藤田）



第18図 茨木遺跡（IK 13-1）調査区配置図

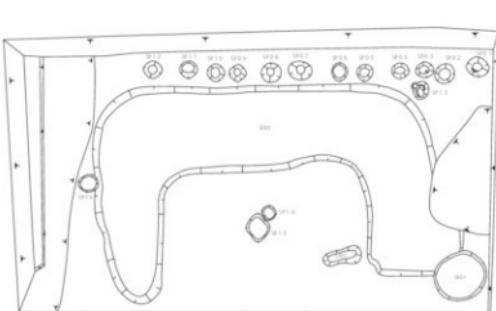


第19図 茨木遺跡（IK 13-1）調査地位置図

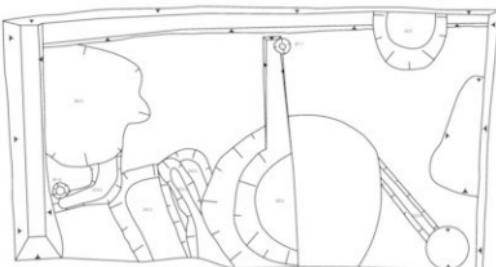


- 底土 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルト
瓦・陶器・大穀を多く含む
1. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルト
 2. 2.5m厚(黄褐色粘質シルト)まじり細粒砂、瓦含む (1面上面)
 3. 10cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト (2面上面)
 4. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルト (西壁6列に対応)
 5. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルト
 6. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルト 土塊片含む
7. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂
8. 10cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルトと
2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルトが混じる
9. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルトに
2. 30cm厚(黄褐色粘質シルト)ブロック含む。直径5cmの礫ばらに含む
10. 2. 30cm厚灰褐色細粒砂より粘質シルトに
2. 30cm厚(黄褐色粘質シルト)ブロック、瓦含む

2. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルトに
陶器・瓦・瓦塊含む
3. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルトに
陶器・瓦・瓦塊含む
4. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む
5. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む
6. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む
7. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
瓦・陶器・大穀を多く含む
8. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む
9. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む
10. 2. 30cm厚(黄褐色細粒砂)まじり粘質シルト
土塊片含む



第1遺構面



第2遺構面

0 2m
(1:80)

第20図 萩木遺跡(IK 13-1)調査区平面・断面図

遺構

第1面調査区北端で柱列を12基検出した。直径約30cm、深さ5~15cmの柱列が東西方向に延びており、東側は調査区外へ続く可能性がある。西側は、搅乱によって確認できなかつたが、後述するSD1と関連性があるものと考えた場合、調査区内に収まる可能性もある。SP06~11にかけての断面からは、腐食した木の痕跡を確認できる。また、SP06の表面には焼土が認められる。各ピット内からは磁器や瓦などが出土している。

SD1はコの字状の平面形で幅約130cm、深度約10cmを測る。平面的特徴から、区画を意識

した溝、あるいは建物基礎土台等の可能性があるが詳細は不明である。

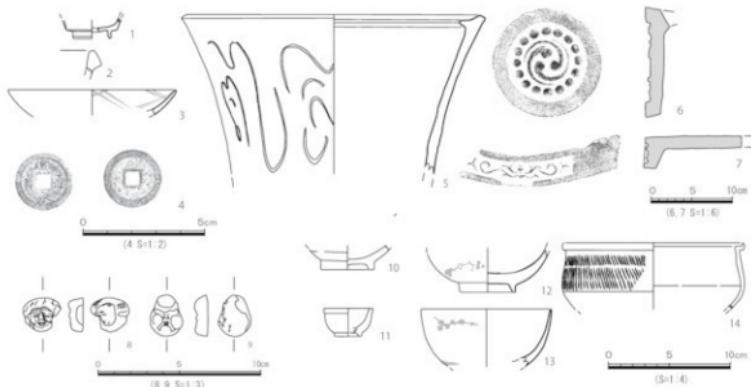
第2面

井戸2基、溝、土坑等を検出した。SE01は北側壁際で検出した。幅約80cmで、遺構中央の落ち込んだ部分に瓦片を含む薄い粘質シルトの堆積がみられるものの、それ以下は均一の粗砂が堆積しており遺物は含まない。検出面から約50cmの深度で湧水層が認められる。SE02は調査区中央付近で検出した。直径約200cmを測る。堆積状況はSE01と同様で、検出面から約60cm下げるとき湧水層がある。

いずれも井戸であると考えられるが、最下層まで掘削をおこなうことができなかつたため、遺構の厳密な所属時期は不明である。また、人為的な埋戻しの様相もみられるが、第1面を構成するベース土とは異なるため、埋戻し時期も不明である。SD02はL字状の平面形を呈している。西側は、調査区外へと延び、北側は木痕と考えられる土坑状の掘り込みに削平を受けているため、詳細は不明であるが、第1面で検出した柱列の途切れる位置を踏まえて考えた場合、SD02を境として土地区画や建物範囲が分かれている可能性もある。(藤田)

遺物

1はSP07から出土した磁器片で、復元高台径3.5cm、残存高1.8cmをはかる。正八角形の小碗で、全体に透明釉を施しており、外面には吉祥文の盃や丁字などが描かれている。また、2は、SP11から出土したホウロクの口縁部で、19世紀初頭以降の所産と考えられる。3は磁器の皿で、復元口径13.8cm、残存高2.0cmをはかる。全体に透明釉を施しており、内面には草文が描かれている。染付けの発色が悪い。4は、寛永通宝で「寶」字下部が「ハ」となる「ハ貝宝」である。背面は無地である。1668年以降、明治期まで鋳造が続いたため時期の特定は難しいが、19世紀頃におさまるであろう。5は、SE02から出土した瀬戸の水瓶である。復元口径24.8cm、残存高13.0cmをはかる。全体に黄瀬戸釉を施し、緑釉や鉄釉などの複数の釉薬を掛け流している。外面には丸彫りの唐草文が描かれており、18世紀後葉以降の所産である。また、6は軒丸瓦で、珠文の数が16個、巴文の尾が他のものと重ならず、独立している。瓦当面に剥離材としてキラコが用いられている。外縁と内縁の幅が広く、概ね18世紀中頃以降



第21図 茨木遺跡（I K 13-1）出土遺物実測図

の所産であると考えられる。7は軒平瓦で、三葉文下部の萼の先端が二又に分かれる。また、左右両端の唐草文の枝葉が大きい。中心の実の肥大化はまだみられないことから、概ね18世紀中頃の所産である。

8・9は調査区北西端のSK04から出土した泥面子である。8は、おたふくを象ったもので、高さ3.2cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmのものである。9は、恵比寿を象ったもので、高さ2.6cm、幅2.9cm、厚さ1.1cmのものである。いずれも型押しでつくられたもので、9は裏面に指押しの痕跡がのこる。概ね18世紀後半の所産である。

10はSK02から出土した陶器の碗である。高台径4.4cm、残存高2.0cmをはかる。内面に透明釉が施されるものの、外面は露胎している。見込み部に砂目の跡が残る。11はSK03から出土した陶器の小碗である。復元口径4.0cm、復元高台径2.2cm、高さ2.3cmをはかる。

その他、遺構以外から出土した遺物で、実測し得たものを12～14に示した。12は西側側溝内から出土した磁器で、復元高台径4.6cm、残存高2.5cmをはかる。見込み部には蛇の目釉剥がみられ、疊付にははなれ砂が付着している。外面には梅花文が描かれており、全体に透明釉が施されている。染付けの発色が悪い。13は、北側側溝内から出土した磁器で、12同様全体に透明釉が施され、梅花文が描かれた碗である。復元口径10.8cm、残存高4.7cmをはかる。14は、1面精査時に出土した行平鍋の口縁部である。体部外面にトビカンナ痕を有し、伊賀焼きの可能性が考えられる。18～19世紀の所産と考えられる。(大向)

まとめ

今次調査区では2時期の遺構面を確認した。各面から出土した遺物の所属時期をみると、いずれも18～19世紀代の範疇で捉えられ、その転換期について確定的な情報は得られなかつた。北壁断面をみてみると第2面を検出した②層が、調査区中央からやや西よりの位置で切れており、第1面を構成する①層はそれを覆う形で堆積している。第2面で検出したL字を呈す区画溝SD02と②層の落ちこむ周辺を境に、土地区画あるいは土地利用が異なっていたと考えることができる。①層が②層を覆う形で西側に続くのは、それまであった土地区画を整地し、西側に延伸しているものと捉えることも可能であろう。

当該地周辺は、茨木城城下町として成立し、茨木城廃城後も近世在郷町として発展してきた地域である。したがって、中世末以降は、自然堆積層の上面に生活が営まれるというより、建物の建替えや土地利用の変化に伴い整地等をおこない生活が営まれている状況が多くみられる。言い換えれば、茨木遺跡各調査区における江戸期の土地利用、改変回数によって面が異なり、茨木遺跡の中で共通した遺構面把握が困難な状況でもある。

しかしながら、明治期の地籍図をみてみると、現在の道路や水路と一致する点が多く認められ、今次調査区で検出した柵列や区画を意識した溝で得られたような空間や建物軸等の情報を検討していくことで、各調査区の時期的な把握や変遷が明らかになっていくものと考えられる。(大向・藤田)

茨木遺跡（IK 13-6）

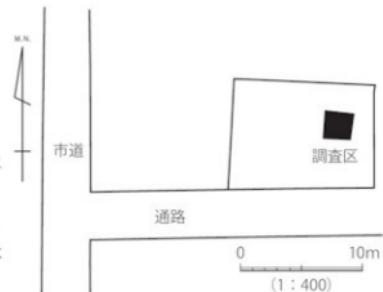
所在地 茨木市別院町 1437番1、1437番3

調査期間 平成25年12月2日

調査担当 高村 勇士

調査に至る経過

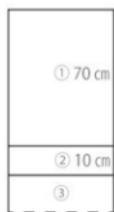
茨木遺跡内で個人住宅建設が計画されたため、平成25年12月2日に申請地内において2m×2mの調査区を設定し、確認調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため、本発掘調査をおこなった。



第22図 茨木遺跡（IK 13-6）調査区配置図

基本層序

断面柱状図①は層厚約70cmの盛土。②は層厚約10cmの整地土層である5YR3/6暗赤褐色細粒砂混じりの2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂。③は地山層であり7.5Y6/1灰色粘質シルトである。なお、③上部（南壁断面第3層）は、鉄分の沈着により変色している。今次調査では、②までを機械掘削し、③上で遺構を検出し調査をおこなった。ただし、一部機械掘削時に掘りす



第23図 茨木遺跡（IK 13-6）断面柱状図



第24図 茨木遺跡（IK 13-6）調査地位置図

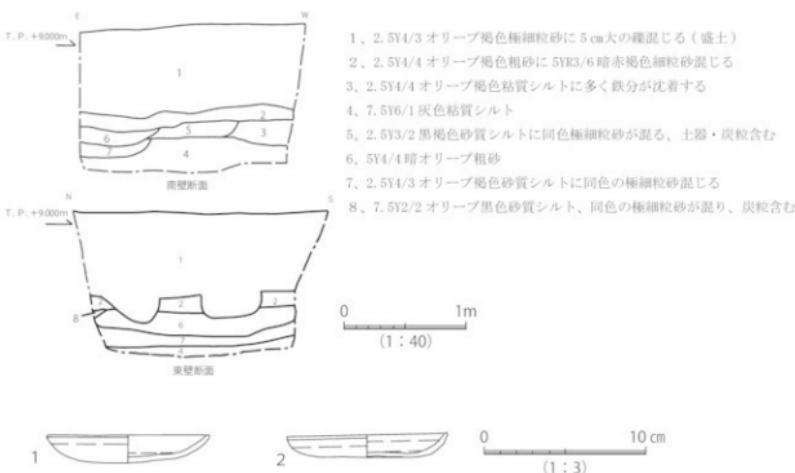
ぎてしまった。遺構・遺物 今次調査では、調査区東側に南北溝（SD1）一条を検出した。SD1は南北に延伸しており、東側の肩部も調査区外にあるため、その規模は不明である。南壁断面を見ると、5・6・7層がSD1の埋土であり、その堆積の状況から、埋没した後に掘り直されたことが推測できる。SD1が最初に作られた時期や掘り直しの時期を考えることができる遺物はないが、5層からは、後述する近世の所産と考えられる土師器皿が出土しており、SD1の最終埋没は近世以降と考えられる。

先述したように5層からは、土師器皿1、2や炮烙の口縁部、瓦器の細片が出土しており、今次調査の出土遺物の大半はこの層から出土している。

遺物1は、口径約10cm器高約1.7cmを測り、体部外面に指頭圧痕が見られる。遺物2も口径約10cm約1.5cmを測り、体部外面に指頭圧痕も見られ、わずかながら底部内面がへそ状に盛り上がる。いずれも詳細な時期を特定するのは困難であるが、近世の範疇で捉えられる。

まとめ

今次調査において検出されたSD1も、掘り直し後の層から近世の所産と考えられる土師器皿などが出土していることから、当該地の近世在郷町の様相を示していると考えられる。今次調査直前に約50m北東でおこなわれた共同住宅建設に伴う調査（IK13-3）において、流路が埋没した後、一面に10cm大の扁平な礫を敷いた大規模な土木工事がおこなわれたことが判明している。今次調査において見られたSD1と標高もほぼ一致することから、その関連性を窺うことができ、今後の検討の材料となる。また、当該地域の近世在郷町を検討する際、天保14年（1843）の茨木村絵図（茨木神社所蔵）により、近世末には現在地に存在することが確認できる唯教寺の存在も、北に延伸するSD1との関連を含めて考慮する必要がある。（高村）



第25図 茨木遺跡（IK 13-6）調査区断面図・出土遺物実測図

中条小学校遺跡（C J 13-4）

調査地 茨木市下中条町23番

2、24番7の一部、25番2

調査期間 平成25年9月17日

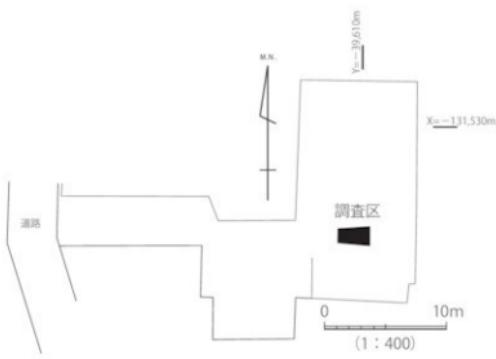
調査担当 大向 智子

調査に至る経過

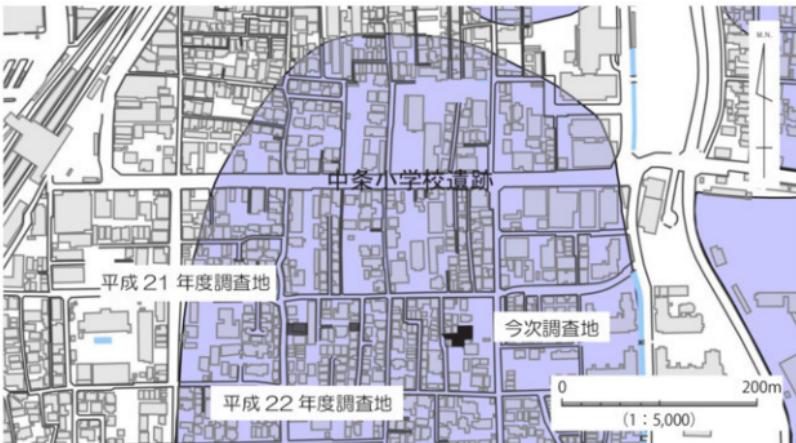
本調査は、茨木市下中条町で計画された個人住宅建設に伴う発掘調査である。申請建物範囲には、既に新築建物の基礎が敷設されていたため、同敷地内の3.4m²の範囲を掘削した。

基本層序

南壁面では、盛土（層厚約40cm）直下から①作土:N4/0灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約10cm）②床土：2.5Y6/1黃灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約5cm）③2.5Y5/1黃灰色極細粒砂まじり粘質シルト（約5cm）④包含層：10YR5/1褐灰色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒・土師質土器片含む（約5cm）⑤遺構面：2.5Y6/2灰黄色粘質シルトまじり細粒砂（約25cm）⑥7.5Y6/1灰色粘質シルトにマンガン含む（全体的に酸化）（約15cm）⑦地山：7.5Y6/1灰色礫・細粒砂まじり粘質シルト（全体的に酸化）の堆積を確認した。遺構検出面は⑤層上面で、T.P.+10,000mである。図2 調査位置図（S=1/5000）遺構・遺物 約2.5m×1.5m幅の調査区の南西隅でSK01を検出した。調査区に切られた状態で検出したため、全体の様相は判然と



第26図 中条小学校遺跡（C J 13-4） 調査区配置図



第27図 中条小学校遺跡（C J 13-4） 調査位置図

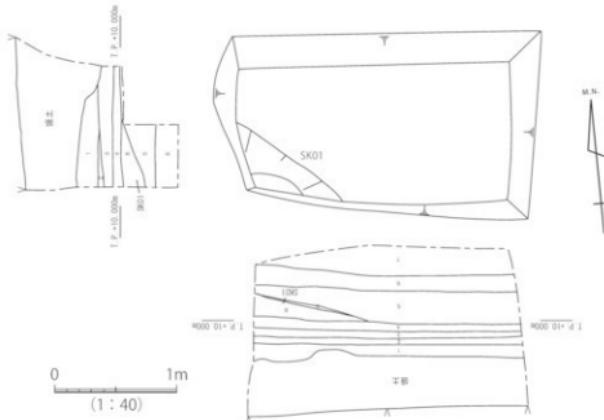
しないが、直径70cm以上×50cm以上、深さ約20cmである。埋土として⑧10YR4/1褐色細粒砂まじり粘質シルトに炭粒含む、が堆積し、東側掘方部分には⑤のベース土が崩れて土壊化した⑨10YR5/1褐色細粒砂が堆積する。出土遺物として弥生土器片や須恵器片が挙げられる。全て細片で実測に耐えうるものはないが、弥生土器の体部片にはタタキが残るものがある。

まとめ

当該地は弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡である中条小学校遺跡包蔵地内に位置する。付近一帯の調査では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構面の広がりがみられる。周辺の調査事例をみてみると、当該地の北側及び西側へ約200m離れた位置での遺構検出面がT.P.+11.2~10.8mであるのに対し、当該地での遺構検出面はT.P.+10.0mである。周辺の地形は北西から南東へ向けての緩傾斜がみられるが、200m程度の距離でこの差がうまれていることから当該地周辺には窪地があったことが想定できる。今回検出した遺構は、細粒砂の上からの切り込みであり、付近一帯でみられるベース土とは様相が異なる面での検出となった。当該地は東側に元茨木川が流れているため、その支流があった可能性も考えられる。今回の調査によつて、弥生時代後期頃の地形を考えるうえでも貴重な資料を得ることができた。

参考文献

茨木市教育委員会 2010『平成21年度発掘調査概報—個人住宅建築に伴う発掘調査報告—』茨木市教育委員会 2011『平成22年度発掘調査概報—個人住宅建築に伴う発掘調査報告—』



- 1 N4/0灰色極細粒砂まじり粘質シルト（作土）
- 2 2.5Y6/1黄色極細粒砂まじり粘質シルト（床土）
- 3 2.5Y5/1黄色極細粒砂まじり粘質シルト
- 4 10YR5/1褐色細粒砂まじり粘質シルト
- 5 2.5Y6/2灰黄色粘質シルトまじり細粒砂（ベース土）
- 6 7.5Y6/1灰色粘質シルトにマンガン含む（全体的に酸化）
- 7 7.5Y6/1灰色細粒砂まじり粘質シルト（全体的に酸化）（地山）
- 8 10YR4/1褐色極細粒砂まじり粘質シルトに炭粒・土師質土器片含む炭粒・土師質土器片含む（包含層）
- 9 10YR5/1褐色細粒砂に土師質土器片含む

第28図 中条小学校遺跡（C J 13-4）調査区平面・断面図

中条小学校遺跡（C J 13-7）

所在地 茨木市奈良町 590番2、591番2

調査日時 平成 25年 12月 11日～12日

調査担当者 高村勇士

調査に至る経過

今回、中条小学校遺跡内で個人住宅建設の

計画があり、平成 25年 12月 11日に確認調査

をおこなったところ、遺構・遺物を検出した第29図 中条小学校遺跡（C J 13-7）調査区配置図のとおり、本発掘調査を同日から平成 25年 12月

12日まで 2日間おこなった。

中条小学校遺跡は、昭和 51年度に中条小学校改築に伴って発見された遺跡で、その南端は東奈良遺跡と重複している。今回の調査区は南端付近に位置しており、東奈良遺跡に近接した場所にあたる。

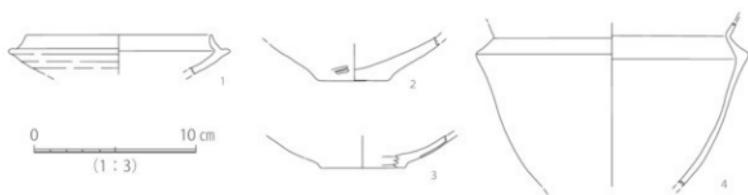
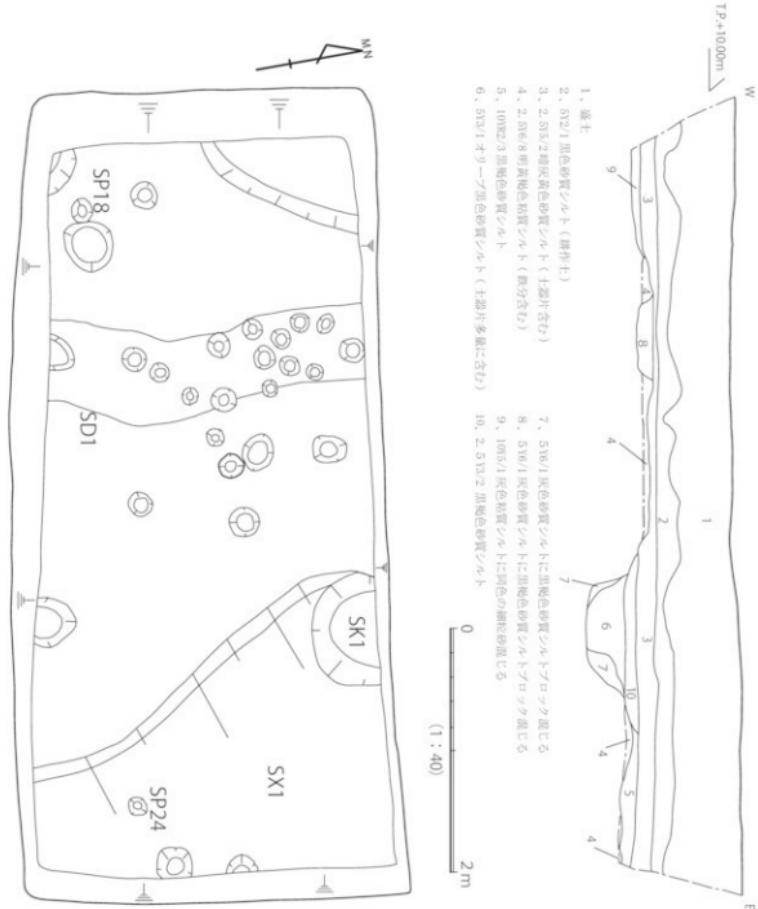
基本層序

調査区の現地表面の標高は T.P. + 10.2m である。基本層序は、

①層から④層に大別できる。①層は盛土。②層は 5Y2/1 黒色砂質シルトの耕作土。③層は 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルトの遺物包含（C J 13-7）断面柱状図



第31図 中条小学校遺跡（C J 13-7）調査地位置図



第32図 中条小学校遺跡（CJ 13-7）調査区平面・断面図・出土遺物実測図

層で、直下の④層上面が凹凸するのに対し③層上面はほぼ水平となっていることから、上面は耕作にともなって整地されていると考えられる。④層は鉄分を多く含む 2.5Y6/8明黄褐色粘質シルトの地山層である。遺構は④層上面で検出した。なお、④層上面は T.P. + 9.5m(GL - 0.7m) を測る。

遺構・遺物

SK 1 は、本調査区の中では比較的多くの遺物を含む土坑である。その半分が調査区の外にあり全容は確認できなかつたが、検出した部分から推定するに直径約 1m を超える円形であると考えられる。SK 1 の時期について、出土遺物の大半は弥生土器であり（2・4）、弥生時代と考えることができるが、詳細な時期の特定には至らない。また、わずかに古代の所産と考えられる須恵器も出土しているが、その遺構断面観察から、後世の流入と考えて支障はない。また、後述の SX1 を切っていることも遺構断面の観察により確認できる。

柱穴状遺構は、SP18・SP25 とそれ以外に大別でき、本調査区の遺構検出面には少なくとも 2 時期の遺構群が存在していると考えられる。

SP18・SP25 の埋土は、黒褐色砂質シルトで、検出面から SP18 が 11.3cm、SP25 が 19.7cm と他の柱穴状遺構と比して深い。

上記以外の柱穴状遺構の多くはごく浅く、上部の大半を削平されたものと考えられる。ただし、SP18、SP25 以外の柱穴状遺構の埋土は、暗灰黄色砂質シルトで一樣であり、同一の状況で埋没したものと推測できる。それらの埋土には、弥生土器や、須恵器・土師器の細片などが確認できたが、いずれも細片であり詳細は不明なところが多い。

SD1 の上から切っている柱穴状遺構の一部は、SD1 の埋土の濃淡を検出してしまった可能性がある。

しかし、SD1 の上面以外にも同様の柱穴状遺構は存在し、それらと関係する可能性もあるため、柱穴状遺構として記録した。

また、③の遺物包含層まで機械掘削を行つたが、その中から 1・3 が出土した。1 は復元口径約 11.5cm を測る古墳時代後期の須恵器の杯身である。3 は 13 世紀頃の所産と考えられる樟葉型瓦器椀である。調査区東側に広がる遺構（SX1）を検出した。北、南、東端は調査区外に延びており、全容は確認できず、その性格は不明であるが、弥生土器片や須恵器片などが出土した。

まとめ

今次調査区のおよそ 100m 西側では、平成 14 年度・平成 15 年度・平成 18 年度と共同住宅建設に伴い発掘調査が実施されており、弥生後期後半から古墳時代前期初頭の円形周溝墓や、奈良時代から平安時代の柱列や建物跡が検出されているが、今回の調査では、それらに直接関わる遺構は検出できなかつた。ただし、SK 1 が弥生時代に該当することから、既往の調査区と同時期に存在した可能性も考えられる。また、西側の平成 18 年度の調査区の遺構面は、北側が T.P. + 10.6m、南東端で T.P. + 10.2m であった。今次調査区の遺構面は、T.P. + 9.5m 前後であり西側の調査区よりも約 0.7m 低い。これまでの調査でも遺構面が北西-南東方向に傾斜して下っていることが確認されているが、今回の調査により、さらに東に遺構面が下っていることが確認できた。（高村）

参考文献

- 茨木市教育委員会 2003 『平成 14年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2004 『平成 15年度発掘調査概報』
- 茨木市教育委員会 2007 『平成 18年度発掘調査概報』

倍賀遺跡（HK 13-2）

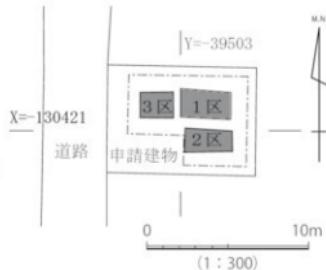
所在地 茨木市春日四丁目 228番3

調査期間 平成 25年 11月 18・19日

調査担当 木村 健明

調査に至る経過

大阪府茨木市春日四丁目で計画された個人住宅建設に伴い、約 12.8m²の調査を実施した。調査は掘削土置き場の都合上 3箇所（1～3区）に分けておこなった。以下、調査成果の概要を報告する。



第33図 倍賀遺跡（HK 13-2）調査区配置図

基本層序

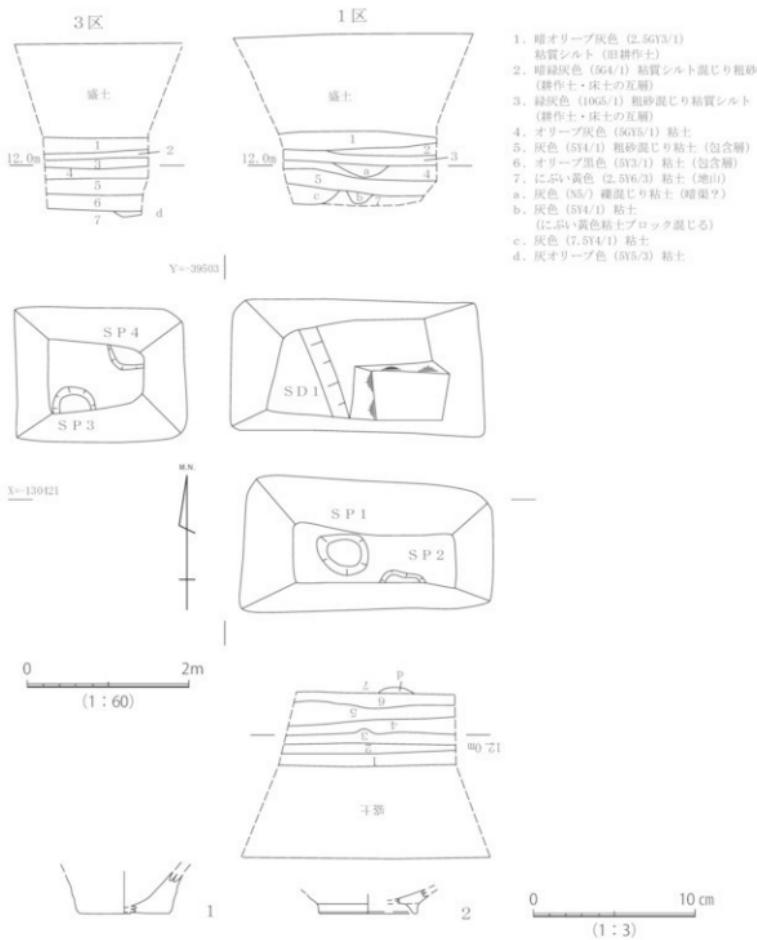
現地表面の標高は 13.5m 前後を測る。各区とも層序はほぼ同じである。盛土（厚さ 1.1m）の下に暗オリーブ灰色粘質シルト層（旧耕作土・厚さ 15cm）、暗緑灰色粘質シルト混じり粗砂・緑灰色粗砂混じり粘質シルト層（各厚さ 15cm・耕作土と床土の互層）、オリーブ灰色粘土（厚さ 20cm）、灰色粗砂混じり粘土・オリーブ黒色粘土（各厚さ 20cm・包含層）があり、地山であるにぶい黄色粘土となる。

遺構

1区で溝 1条（SD 1）、ピット 1基、2区でピット 2基（SP 1・2）、3区でピット 2基（SP 3・4）を検出した。SD 1は、1区の西側で検出した。長さ 1.0m 以上・幅 1.0m 以上・深さ 20cm である。埋土は灰色粘土の単層である。ピットは壁面で確認したもので深さ 14cm を



第34図 倍賀遺跡（HK 13-2）調査位置図



第35図 倍賀遺跡 (H.K.13-2) 調査区平面・断面図・出土遺物実測図

測る。埋土は、灰色粘土の単層である。

S P 1・2は2区で検出した。S P 1は、長径60cm・短径50cm・深さ12cmである。埋土は灰オリーブ色粘質シルトの単層である。S P 2は長径50cm以上、短径25cm以上、深さ8cmである。埋土は灰オリーブ色粘土の単層である。S P 3は長径50cm・短径30cm以上・深さ28cmである。埋土は黒褐色粘質シルトの単層である。S P 4は長径50cm以上・短径25cm以上・深さ8cmである。埋土は灰オリーブ色粘土の単層である。いずれも遺物は出土していない。

遺物

遺物は包含層中から土師質焼成の土器・瓦器などが数点出土したのみである。

その内、図化可能な遺物は2点である。1は平底の底部である。3区西壁第5層から出土した。弥生土器の可能性がある。磨滅が著しく調整は不明である。2は土師器梶の底部である。2区の包含層出土である。断面三角形状の貼付高台をもつ。

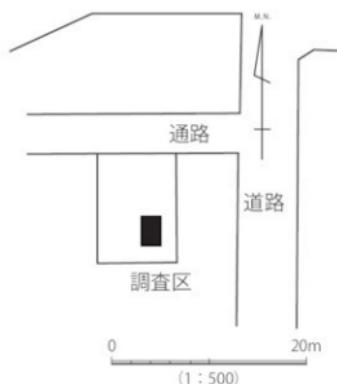
まとめ

今回の調査では、溝やピットを検出した。遺構中から遺物が出土していないため、時期は不明である。平成20年度におこなわれた北側隣接地の調査においても同様の様相を示しているようであり、溝状遺構の一部を検出している。遺構検出面がG L - 2.0m前後と深いため、周辺にも良好に遺物包含層・遺構が分布していると考えられ、調査成果を蓄積することで、周辺の様相が明らかになっていくと思われる。(木村)

参考文献

茨木市教育委員会 2009『平成20年度発掘調査概報－個人住宅建築に伴う発掘調査報告－』

牟礼遺跡 (MR 13-8)



所在地 茨木市園田町 749番地 24・749番地 25

調査期間 平成 25年 11月 14日

調査担当 高村 勇士

調査に至る経過

牟礼遺跡内で個人住宅の建設が計画され、平成25年11月14日に建設予定地内で2m×3mの調査区を設定し確認調査をおこなった。調査区の範囲内では、遺構は検出されなかったが、良好な包含層が確認できた。

基本層序

今次調査区の土層は6層に大別できる。①層は盛土。②層は耕作土。③層は暗緑灰色粘質シルト層。④層は暗オーリーブ灰色極細粒砂まじりの粘質シルト層。⑤層は黒褐色砂質シルトの遺物包含層。⑥層は黄灰色極細粒砂層である。GL-130cm付近で検出した④層は、均質で安定しており、ペース面を構成しうる均質で安定した基盤層ではあったが、平面精査をしても、今次調査区では遺構・遺物は確認できなかった。GL-155cm付近の⑤層において、層厚25センチの土壤化した遺物包含層を検出し、下で触れる遺物が出土している。



第37図 牟礼遺跡 (MR 13-8) 調査地位置図

遺構・遺物

今回の調査は、その面積が狭小であったこともあり、遺物包含層直下の層およびその他の層においても遺構は認められなかった。出土遺物としては、須恵器杯蓋や土師器碗、瓦器碗などが認められた。1は須恵器杯蓋であり、復元口径 17.4cm、残存高 1.7cmを測り、7世紀から8世紀の所産と考えられる。2の土師器碗は9世紀から10世紀の範疇で捉えられ、復元口径 13.2cm、器高 3.5cmを測る。内面にみがきは見られず、外面には口縁端部に横なでが見られ、体部には指頭圧痕が確認できる。3は瓦器碗の口縁部であり、暗文などから和泉型のIII期からIV期前半のものと考えられ、13世紀から14世紀の年代観が与えられる。



第38図 卯礼遺跡（MR 13-8）

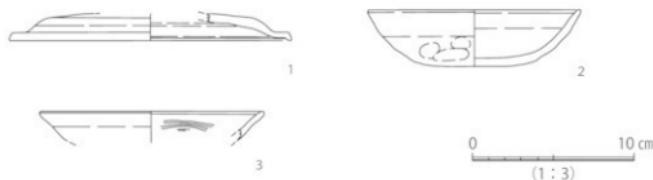
断面柱状図

まとめ

牟礼遺跡は、中津町・中村町・末広町・園田町に広がる安威川右岸の沖積地をその範囲としているが、その南部ではこれまで平成22年度の調査地において遺物包含層を検出しているのみであった。今回の調査地においても、層厚25cmの良好な遺物包含層と遺物が確認できた。また、古代の杯蓋や13世紀から14世紀の瓦器碗などが出土し、今回の調査において出土した遺物も平成22年度の調査地と同様に、時代に大きな幅を持っている。牟礼遺跡の南部では未だ遺構が検出されておらず、不明な点は多いが、今後の調査においては注意を喚起できる知見が得られた。（高村）

参考文献

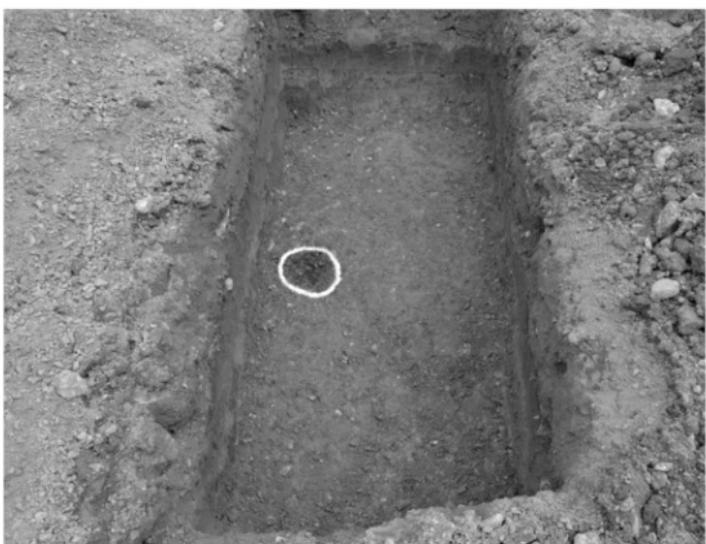
茨木市教育委員会 2011『平成22年度発掘調査概報』



第39図 卯礼遺跡（MR 13-8）出土遺物実測図

写真 図版

図版
再原
遺跡
跡3
M
-
H



MH 12-3 (西から)

M
1

3
H



MH 13-1 (西から)

図版

豆原

遺

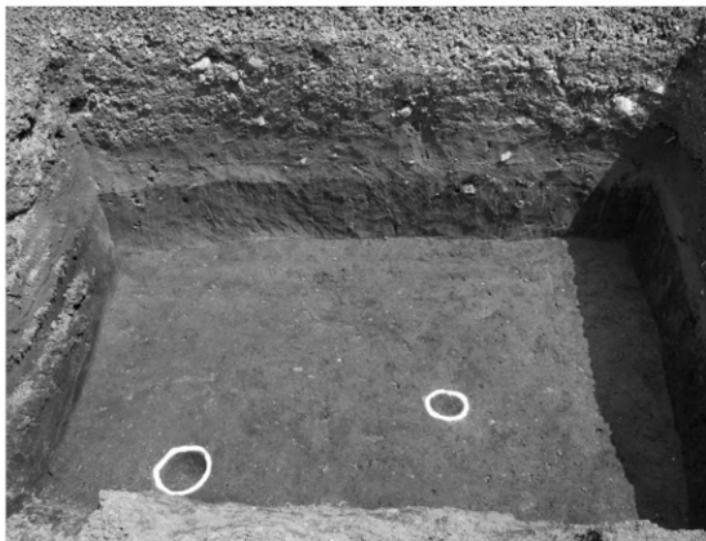
跡

M

—

4)

H



MH 13-3 (西から)

M
1

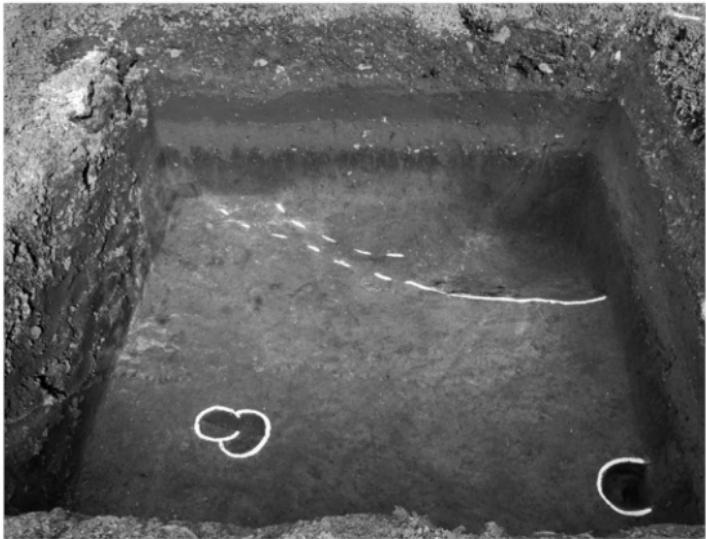
2
H

1



MH 12-4 (西から)

図版
耳原
遺跡
(5)
他(



MH 13-5 (西から)

M
H



耳原遺跡 各調査区遠景

1

圖版

耳原

遺

跡(2)・春

日(一)

遺(3)

M跡

H

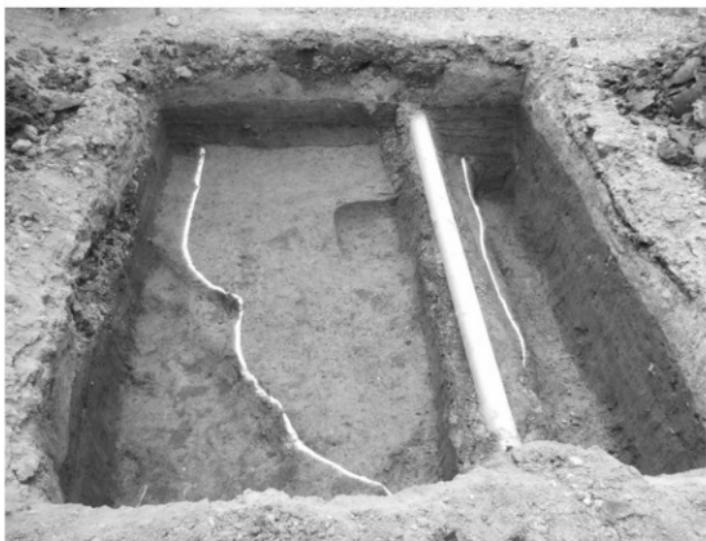
K
1



MH 13-2 全景 (北西から)



KS 13-3 (東から)



K S 13-4 全景（北西から）



K S 13-5 (西から)



C J 13-4 全景 (北東から)

遺



C J 13-7 (西から)



I K 13-1 第1面全景（北東から）



I K 13-6 南壁断面（北から）

図版

陪葬

遺

跡(2)・牟

礼(一)

遺(8)

H
跡

K

M
1



HK 13-2 2区（東から）



MR 13-8 北壁断面（南から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	へいせいにじゅうごねんだいぱらきしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいもあらく(こっこほじょじょうにともなうはくつちょうさ)					
書名	平成25年度茨木市埋蔵文化財発掘調査概報6（- 国庫補助事業に伴う発掘調査）					
シリーズ名	茨木市文化財資料集					
シリーズ番号	第59集					
編著者	藤田徹也（編）大向智子 木村健明 高村勇士 中東正之					
編集機関	茨木市教育委員会					
所在地	〒567-8505 大阪府茨木市駅前三丁目8番13号					
発行年月日	平成26年（2014年）3月31日					
所取遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
耳原遺跡	耳原一丁目281-7, 8, 9, 10, 11	34° 83' 65"	135° 56' 38"	平成25年4月8日～9月5日	18m ²	個人住宅建設工事
耳原遺跡	耳原一丁目276-5	34° 83' 67"	135° 56' 48"	平成25年7月24日～7月25日	16.5m ²	個人住宅建設工事
春日遺跡	春日一丁目84-5	34° 81' 90"	135° 56' 24"	平成25年8月5日～8月7日	31.5m ²	個人住宅建設工事
春日遺跡	春日五丁目77-15	34° 82' 38"	135° 56' 24"	平成25年9月24日～9月25日	15.2m ²	個人住宅建設工事
春日遺跡	春日五丁目204-29	34° 82' 29"	135° 56' 20"	平成25年10月30日	7.5m ²	個人住宅建設工事
茨木遺跡	大手町1653-3, 1653-4	34° 81' 65"	135° 57' 11"	平成25年6月27日～7月3日	36m ²	個人住宅建設工事
茨木遺跡	前田町1437-1, 1437-5の8～9	34° 84' 79"	135° 57' 45"	平成25年12月2日	4m ²	個人住宅建設工事
中条小学校遺跡	西中条町140-7, 140-13/0～10	34° 81' 15"	135° 56' 39"	平成25年8月27日	11.2m ²	個人住宅建設工事
中条小学校遺跡	奈良町590-2, 590-24/0～10	34° 80' 85"	135° 56' 54"	平成25年12月11日～12月12日	18m ²	個人住宅建設工事
信賀遺跡	春日四丁目228-3	34° 82' 36"	135° 56' 81"	平成25年11月18日～11月19日	8m ²	個人住宅建設工事
牟礼遺跡	園田町749-24, 749-25	34° 81' 36"	135° 58' 17"	平成25年11月14日	6m ²	個人住宅建設工事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
耳原遺跡	集落跡	弥生前期	柱穴・土坑	弥生土器・瓦器		
耳原遺跡	集落跡	弥生前期	柱穴・土坑	土師質土器		
春日遺跡	集落跡	古墳時代	溝			
春日遺跡	集落跡	古墳時代	溝	須恵器・土師質土器		
春日遺跡	集落跡	古墳時代	溝	土師器・須恵器・瓦		
茨木遺跡	集落跡	古墳時代	柱穴・井戸・溝・土坑	陶磁器・錢貨・瓦・泥面子		
茨木遺跡	集落跡	古墳時代	溝	土師器		
中条小学校遺跡	集落跡	弥生・古墳時代	土坑	弥生土器・須恵器		
中条小学校遺跡	集落跡	弥生・古墳時代	柱穴・溝・土坑	土師器・須恵器		
信賀遺跡		古墳時代	溝・柱穴	土師質土器・瓦器		
牟礼遺跡	集落跡	縄文晚期		土師器・須恵器・瓦器	遺構は確認されず。	

平成 25 年度 茨木市埋蔵文化財発掘調査概報 6

- 国庫補助事業に伴う発掘調査 -

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

発 行 茨木市教育委員会

印刷所 株式会社トウユー